

意志・推量形式の終止・非終止用法の推移

北 崎 勇 帆

1. はじめに

現代語において、(ヨ)ウ・ダロウ¹は文末に生起するかもしくは文末付近で終助詞類を後接して意志・推量の意を表すのが一般的な用法であって、名詞を後接する例は許容度が落ちる(三原 1995)。

- (1) a. あの人はきっと来る {だろ／はずだ}。
 b. 明日は大学に行こう。
 (2) a. 来る {??だろ／はずの} 人が3名いる。
 b. 明日 {*行こう／行く} 講義が休講になった。

金田一(1953)は現代語での観察に基づき、「終止形の「う」「よう」と連体形の「う」「よう」とは、用法も意義もちがうものである」として、このような「不変化助動詞」が「主観的表現」を担うことを説く。そこで「連体形」とされたのは以下の例である。

- (3) a. 仮定の事実を表すもの
 うっかりワイシャツに口紅でもついていようものなら
 行こうが行くまいがこっちの勝手だ
 校長先生ともあろう人がパチンコごときにこるとは……
 b. 可能性を表すもの
 あろうはずがないじゃないか
 人もあろうに口説いた相手が婦警さんだったとは……
 c. スルコトガ許サレテイル, の意
 あろうことかあるまいことか
 なるうことなら一生おそばに…… (金田一 2004 [1953]: 307)

¹ 以下、否定のマイや古代語のムを含め、特にその形式の差を問題としない場合、一括して「ウ」に代表させる。

このうち、「(よ)うが」「まいが」や「あろうに」のような従属節末にウが生起する例は「連体形」とは認め難い(北原 1981: 500)し、問題となるのは助動詞の形態的な位置付けよりもその生起位置であるものと見て、本稿では(1)を「終止位置」、(3)を「非終止位置」として、用法を大きく2つに分割することとする。

現代語の場合、ウの用法はこのように極めて限定的であるが、一方、古代語においては、ウの源流である助動詞ムは(4)のごとく、連体修飾の用法をごく一般的に持ち合わせている。ムのこの用法は「假定・婉曲」の意で捉えるのが教科書的な説明であるが、中古語においてはその「假定」の意を積極的に認めることはできず(山本 2003, 高山 2005, 栗田 2014・2019)、ムは話者が事態を非現実のものであると捉えていることを標示する形式であって、それが文終止の位置で用いられたときに意志・推量の意が現れるものと考えべきところである(城田 1977, 重見 1988, 野村 1995, 尾上 2001・2012)。

(4) a. 思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ。

(枕草子 7 [1001] 20-枕草 1001_00005,40)

b. 月のいでたらむ夜は、見おこせたまへ。

(竹取物語 [9C] 20-竹取 0900_00001,187170)

さて、古代語において活発であった非終止位置のムが現代語においては固定された環境にしか現れないのであれば、現代語における用法の棲み分けは、(上例(4)が「思おう子」「月の出よう夜」と訳出できないことから予想されるように)非終止位置のウの衰退の過程で、いくつかの用法が固定化して残存したことによって生まれたものと見ることになる。ウの連体用法は近世頃を境として生産的でなくなるのが知られており(山口 1991, 土岐 1992)、ここに「非終止位置のウの衰退と固定化」「ウの終止用法への一本化」という歴史が描かれる。

非終止用法

----- (固定化した) 非終止用法

(あろうことか、～うものなら、…)

終止用法 (意志・推量)

————▶

終止用法 (意志・推量)

他方、ウがむしろその後接要素を拡げるといふ、この流れに反するような事例が見られることに注目したい。例えば(3)の「行こうが行くまいが」について、稿者は北崎(2019)において、次例(5)のような「(よ)うと(も)」「まいと(も)」が中世前期以降に発生し、「(よ)うが」「まいが」が近世以降に発達したことを述べた。助動詞ムは非現実領域に関わるものであるから、本来は非現実の事態を仮構するトモ節には包含されず、中古に「むとも」の例はない(此島 1973: 270, 小

田 1990)。すなわち、当該複合辞の逆接仮定条件の用法はムが本来的に持つものではなく、この事例は「非終止位置のウ」が中世以降に新たに用法を獲得していることを示す。

- (5) a. 男, 「実ニ今ハ生ムトモ殺サムトモ只御心也」ト云ケレバ,
〔生かすのも殺すのも (あなたの) お心次第です〕
(今昔物語集巻 29-3 [12C 初] 30-今昔 1100_29003,11740)
- b. 清人 (清人 刺文公也 高克好利 而不顧其君) — 此詩は鄭の文公を刺すぞ。高克は鄭の大夫ぞ。財利を好うで、主はなにと有うとまゝよと云て、利を本にしたぞ。
(毛詩抄巻 4 [1539] 1-358-10)
- c. 二世とかねたるおつとのさいごをみて、女の身として帰ろふか、我もこわいたけはこはし、こおうないといふてからはするが丸様でござろうがおにであらうが。へちまのかは共ぞんぜぬ。
(日本記素戔鳴尊 [1701 演] 443 上 2)

この他にも、中世後期には以下のようなウナラバ・ウニハ・ウバの例が見えることが指摘されるが (外山 1969, 蜂谷 1977, 小林 1979), これらもやはり、それまでナラバ・ニハ・バに包含され得なかったウが、当代に至ってその後接可能性を拡張したものであると見ることができる。なお、ウナラバの場合は上のウト(モ)とは異なり、現代には引き継がれていない。

- (6) a. サウダニアラウナラバ, 死ノウヲモ, ナントモ思ワヌゾト云ゾ。
(史記抄・秦本紀 [1477] 1-325-5)
- b. 民ノ心ヲ, ワヅラハシテ, カウアラウニハ, 法ヲ犯シテハ, カナフマイヨト, 思ワセウタメナリ。
(史記抄・孝文本紀 [1477] 2-228-5)
- c. のぼらせられふば, おともいたさふ。
(虎明本狂言集・宗論 [1642 写] 40-虎明 1642_06026,5470)

- (7) そのようにさえ{*あろうなら/あるなら}, 死ぬことをも, なんとも思わない。

(1-3) に見たように、確かに現代語においては非終止位置におけるウの生産性は失われているため、「非終止用法の衰退と固定化」という着点に疑義を挟む余地はない。しかしながらそれは上の事例に鑑みるに、現代語の様相が古代語におけるそれからの単調減少であることを意味せず、現代に至る過程において新しい用

法が生み出されたり、あるいはそれが現代に引き継がれたりしたということも考慮に入れる必要があるのである²。

こうした前提に基づき本稿では、ウの用法と文構造の通時的変化を解明するための基礎的な調査として、ウとその周辺の助動詞がどのような形態に接続し得たかを通時的に調査することにより、「非終止位置のウの衰退」という長期的な変化の内実に何が起こっていたのかを示したい。

2. 調査方法

以下、調査資料・調査方法を示す。

調査資料

- ・ 国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』(以下 CHJ) の以下のサブコーパス
 - ・ 奈良-万葉集
 - ・ 平安-仮名文学³
 - ・ 鎌倉-説話・随筆 (コアのみ), 鎌倉-日記・紀行
 - ・ 室町-キリシタン(天草版平家物語 [1592 刊], エソポのハブラス [1593 刊]), 室町-狂言(虎明本狂言集 [1642 写])
 - ・ 韻文・ト書きを除く。江戸時代編は会話文のみ。明治大正編・雑誌は口語のみ。
 - ・ 江戸-洒落本, 江戸-人情本
 - ・ 明治・大正-雑誌 (コアのみ), 明治・大正-初期口語
- ・ 国立国語研究所編『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ, コアのみ)
- ・ CHJ に収録されない資料群のうち, 特に中世後期語・近世語資料として以下を追加調査。
 - ・ 前期抄物より『史記抄』[1477]⁴, 後期抄物より『玉塵抄』[1563] (東大本巻 1 のみ)⁵
 - ・ 近松世話浄瑠璃 24 作品⁶

² なお, 吉田 (2011) は土岐 (1992) を引き、『伊勢物語』との使用率を比較した上で, 「時代を遡るほど従属節用法が多くなるわけではない」こと, 『エソポのハブラス』の例が「単純に伊勢物語と比較すると, 従属節用法の使用率が増加していることになる」ことを指摘する。本稿の問題意識も, これに同調するものである。

³ 『大鏡』は『平安時代編』に収録されているが, 全て中世前期の例として扱う。

⁴ 亀井孝・水沢利忠 (1965-1973) 『史記桃源抄の研究』日本学術振興会, 住谷芳幸氏作成テキストデータ (<http://www.gijodai.ac.jp/user/sumiya/kaken.htm>) を検索に使用

⁵ 鈴木賢祐・康凱欣・大島英之・小池俊希・北崎勇帆 (2019) 「東大国語研究室蔵『玉塵抄』解題と翻刻 (一)」『日本語学論集』15

⁶ 『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅲ近松』公開予定の構築中データを使用させていただい

検索キー (CHJ)

- ・語彙素「む|むず|う|うず|らむ|ろう|けむ|じ|まい|まじ」かつ、「品詞-大分類-助動詞」
- ・このうちク語法は除外し、マジはマジ (マジイ) の例のみを採る。
- ・活用形-大分類-意志推量形

以上の検索・調査により得られた約 41,000 例を、各助動詞の直後にどのような要素が生起するか (もしくはしないか) という観点から、大きく「終止位置」と「非終止位置」の 2 類に分割し、以下の分類に基づいて集計する。

- ・ a. 終止位置
- ・ b. 非終止位置
 - ・ b1. 従属節末
 - ・ b2. 連体形による準体句末
 - ・ b3. 連体修飾位置
 - ・ b3-1. 一般名詞・固有名詞
 - ・ b3-2. 形式名詞

以下、各例を示す。

a. 終止位置

文の終止位置。平叙文の主文末だけでなく、係り結び文や、終助詞を後接する場合も含む。

- (8) a. 何人ならむと問へば、「明石の浦より、前の守新発意の、御舟よそひて参れるなり。源少納言さぶらひたまはば、対面して事の心とり申さん」と言ふ。 (源氏物語・明石 [1010 頃] 20-源氏 1010_00013,28330)
- b. 年の終はりには、なにごとにつけても、思ひ残さざりけむかし。
(蜻蛉日記中 [975 頃] 20-蜻蛉 0974_00008,20430)

b1. 非終止位置・従属節末

終止位置でないもののうち、従属節末にウが生起するもの。「ため」「うえに」「ものなら」など形式名詞と区別の付きにくい場合があるが、ひとまずここに含めて計上した。

た (底本は小学館『新編日本古典文学全集』)。

- (9) a. 男、「実ニ今ハ生ムトモ殺サムトモ只御心也」ト云ケレバ、
 (今昔物語集巻 29-3 [12C 初] 30-今昔 1100_29003,11740)
- b. 「それならば身どもがうつつやらう程に、それにおまちやれ、
 (虎明本狂言集・はりだこ [1642 写] 40-虎明 1642_01015,10260)

b2. 非終止位置・連体形による準体句末

非終止位置のうち、連体形による準体句末のもの。ニを下接する場合などに b1 と区別の付きにくい場合があるが、文意により判断する。

- (10) a. 「げに目の前にゆゆしきさまにて死なんを見んよりは」とて取らせつ
 (宇治拾遺物語巻 10-6 [1220 頃] 30-宇治 1220_10006,8430)
- b. 「いていはふずるは、今の手はめづらしひ手じやが、何といふ手ぞ
 (虎明本狂言集・鼻取相撲 [1642 写] 40-虎明 1642_02006,51240)

b3. 非終止位置・連体修飾位置

非終止位置のうち、名詞を下接して連体修飾を行うもの。一般名詞を下接する場合と形式名詞を下接する場合とで区別しておく。

- (11) a. 元の妻どもは、かぐや姫をかならずあはむまうけして、ひとり明かし暮らしたまふ。
 (竹取物語 [9C] 20-竹取 0900_00001,88770)
- b. いかほどお恨みお叱りも、お前にあうて、この吾妻が。申し上げう言葉はない。
 (山崎与次兵衛寿の門松 [1718 演] 518-10)
- (12) a. 「我が子の仏。変化の人と申しながら、こころ大きさまでやしなひたてまつる心ざしおろかならず。翁の申さむこと、聞きたまひてむや」
 (竹取物語 [9C] 20-竹取 0900_00001,14040)
- b. これ真に内には既に破戒無慚の罪を招くのみならず、他には又仁、義、礼、智、信の法にも背かうずる儀 〈fomucōzuru gui〉 ぢゃ
 (天草版平家物語巻 1-6 [1592 刊] 40-天平 1592_01006,15720)

3. 調査結果

以上の用例収集と分類をもとに、資料の成立年を 50 年ごとに切り捨てて集計を行った結果を表 1・図 1 に、特に本稿で注目したい非終止用法内の用例数の推移を表 2・図 2 に示す。文体差や地域差を考慮しない大雑把な比較ではあるが、以下の 4 点が指摘できる⁷。

⁷ 以下全て、 χ^2 検定によって検定を行った結果を示す (有意水準はいずれも $p < .01$)。

- ・まず、終止用法は一貫して多いが、特に中世後期以降、非終止用法の漸減と並行する形でその割合を増加させ、さらにその勢力を広げる⁸。
- ・非終止用法の内訳を見ると、中世後期における従属節末の例数の増加が目される⁹。
- ・連体用法（一般名詞＋形式名詞）は、特に中世後期以降の例数の減少¹⁰が顕著であるが、その内実では形式名詞に接続するものが中世後期にむしろ増加しており¹¹、一方で中世前期まで活発だった一般名詞に接続する例は中世後期以降に減少する¹²。
- ・連体形による準体句を一般名詞に準ずるものとして見たとき、中世後期以降の準体句末の例数の減少¹³もこれと並行するものとして捉えられる¹⁴。

以上より、第1節に述べた問題が確かに存すること、すなわち、非終止用法は全体としては衰退しつつも、その過程において、非終止用法内での一般名詞の後接例、連体形準体句を構成する例の減少と、形式名詞の後接例、従属節末の例が増加していたことが、ひとまず計量的に確認できた。

以上に述べたことは、使用量の推移という量的変化だけではなく、用法・後続要素の拡張という質的变化としても捉えることができる。以降、調査結果に基づき、第4節で連体用法の固定化の過程について、第5節で従属節末の新用法の発生について、冒頭の問題意識において重要と思われる点を、現代語と対照する形で数点述べる。

⁸ 各時代間における全例中の終止用法の例数の比較による。中世前期以前は終止用法の例が有意に少なく、中世後期以降は有意に多い。

⁹ 各時代間における全例中の従属節末の例数の比較による。中世前期以前は従属節末の例が有意に少なく、中世後期以降は有意に多い。中世前期以前の合計と中世後期の比較、各時代間における非終止用法中の従属節末の例数についても同様。

¹⁰ 各時代間における全例中の連体用法の例数の比較による。中世前期以前は連体用法の例が有意に多く、中世後期以降は有意に少ない。

¹¹ 各時代間における一般名詞と形式名詞の例数の比較による。上代・中古は形式名詞の例が有意に少なく、中世後期・近世後期・近代は有意に多い（中世前期・近世前期・現代には有意差なし）。中世後期、連体節内にウ・ウズ（ル）が多く見られるという指摘（中沢 2004, 福嶋 2011）と一致する。

¹² 「う」「よう」の下に来る体言は、局限されて数語に過ぎない」（湯澤 1954 : 382）

¹³ 各時代間における全例中の準体句末の例数の比較による。中古・中世前期以前は準体句末の例が有意に多く、中世後期以降は有意に少ない。なお、上代は準体句末の例が有意に多いが、古今集も同様の傾向を示すため、これは文体的な差異の反映であろう。

¹⁴ すなわち、μの連体形準体法の衰退は連体用法の衰退が主要因として効いており、近世以降に起こったと考えられる連体形による準体法全体の衰退（原口 1978, 青木 2005, 坂井 2015）とは無関係に始まったものと見る。

表 1 用例の推移

年代	終止	従属節末	準体句末	形式名詞	一般名詞	総計	
上代	750	1740 / 77.47%	35 / 1.56%	65 / 2.89%	60 / 2.67%	346 / 15.41%	2246
中古	900	825 / 82.17%	16 / 1.59%	22 / 2.19%	52 / 5.18%	89 / 8.86%	1004
	950	2015 / 82.38%	24 / 0.98%	140 / 5.72%	119 / 4.87%	148 / 6.05%	2446
	1000	5191 / 65.83%	168 / 2.13%	1049 / 13.30%	682 / 8.65%	796 / 10.09%	7886
	1050	316 / 73.83%	7 / 1.64%	41 / 9.58%	24 / 5.61%	40 / 9.35%	428
前期	1100	1761 / 72.05%	32 / 1.31%	282 / 11.54%	210 / 8.59%	159 / 6.51%	2444
	1200	1425 / 80.42%	25 / 1.41%	112 / 6.32%	107 / 6.04%	103 / 5.81%	1772
	1250	503 / 69.86%	23 / 3.19%	67 / 9.31%	70 / 9.72%	57 / 7.92%	720
	1300	708 / 68.74%	22 / 2.14%	107 / 10.39%	72 / 6.99%	121 / 11.75%	1030
中世	1450	3158 / 80.73%	325 / 8.31%	86 / 2.20%	294 / 7.52%	49 / 1.25%	3912
	1550	1355 / 74.25%	94 / 5.15%	56 / 3.07%	251 / 13.75%	69 / 3.78%	1825
	1600	4148 / 83.14%	623 / 12.49%	71 / 1.42%	120 / 2.41%	27 / 0.54%	4989
	1700	2018 / 88.01%	162 / 7.06%	49 / 2.14%	39 / 1.70%	25 / 1.09%	2293
近世	1750	878 / 89.50%	82 / 8.36%	6 / 0.61%	14 / 1.43%	1 / 0.10%	981
	1800	919 / 83.32%	149 / 13.51%	11 / 1.00%	20 / 1.81%	4 / 0.36%	1103
	1850	1162 / 79.48%	230 / 15.73%	23 / 1.57%	38 / 2.60%	9 / 0.62%	1462
近代	1900	686 / 90.03%	49 / 6.43%	13 / 1.71%	11 / 1.44%	3 / 0.39%	762
現代	2000	2752 / 93.86%	164 / 5.59%	0 / 0.00%	12 / 0.41%	4 / 0.14%	2932

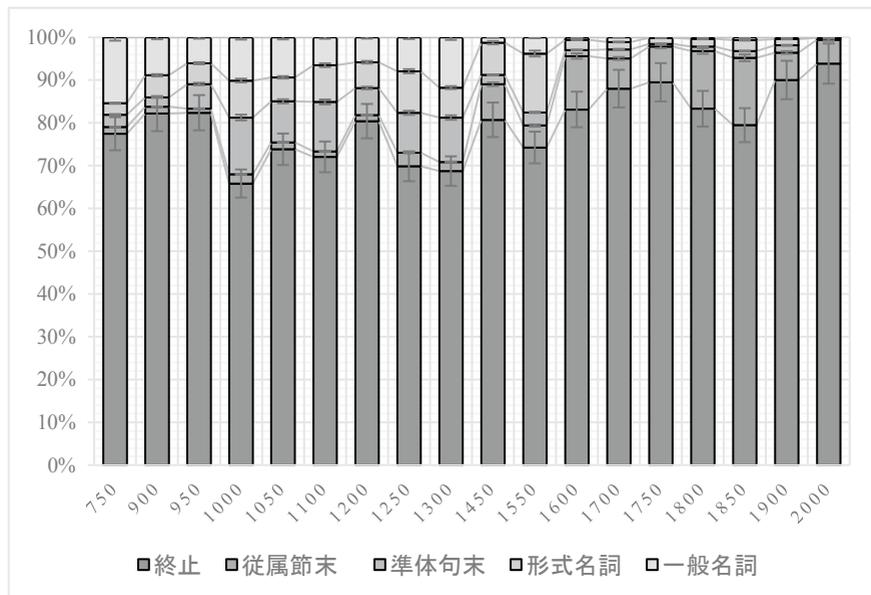


図 1 用例の推移

表 2 非終止用法の用例の推移

年代	総計	従属節末	準体句末	形式名詞	一般名詞	
上代	750	35 / 6.92%	65 / 12.85%	60 / 11.86%	346 / 68.38%	
	900	16 / 8.94%	22 / 12.29%	52 / 29.05%	89 / 49.72%	
中古	950	24 / 5.57%	140 / 32.48%	119 / 27.61%	148 / 34.34%	
	1000	168 / 6.23%	1049 / 38.92%	682 / 25.31%	796 / 29.54%	
	1050	7 / 6.25%	41 / 36.61%	24 / 21.43%	40 / 35.71%	
	1100	32 / 4.69%	282 / 41.29%	210 / 30.75%	159 / 23.28%	
前期	1200	25 / 7.20%	112 / 32.28%	107 / 30.84%	103 / 29.68%	
	1250	23 / 10.60%	67 / 30.88%	70 / 32.26%	57 / 26.27%	
	中世	1300	22 / 6.83%	107 / 33.23%	72 / 22.36%	121 / 37.58%
		1450	325 / 43.10%	86 / 11.41%	294 / 38.99%	49 / 6.50%
後期	1550	94 / 20.00%	56 / 11.91%	251 / 53.40%	69 / 14.68%	
	1600	623 / 74.08%	71 / 8.44%	120 / 14.27%	27 / 3.21%	
近世	前期	1700	162 / 58.91%	49 / 17.82%	39 / 14.18%	25 / 9.09%
	後期	1750	82 / 79.61%	6 / 5.83%	14 / 13.59%	1 / 0.97%
	1800	149 / 80.98%	11 / 5.98%	20 / 10.87%	4 / 2.17%	
	1850	230 / 76.67%	23 / 7.67%	38 / 12.67%	9 / 3.00%	
近代	1900	49 / 64.47%	13 / 17.11%	11 / 14.47%	3 / 3.95%	
現代	2000	164 / 91.11%	0 / 0.00%	12 / 6.67%	4 / 2.22%	

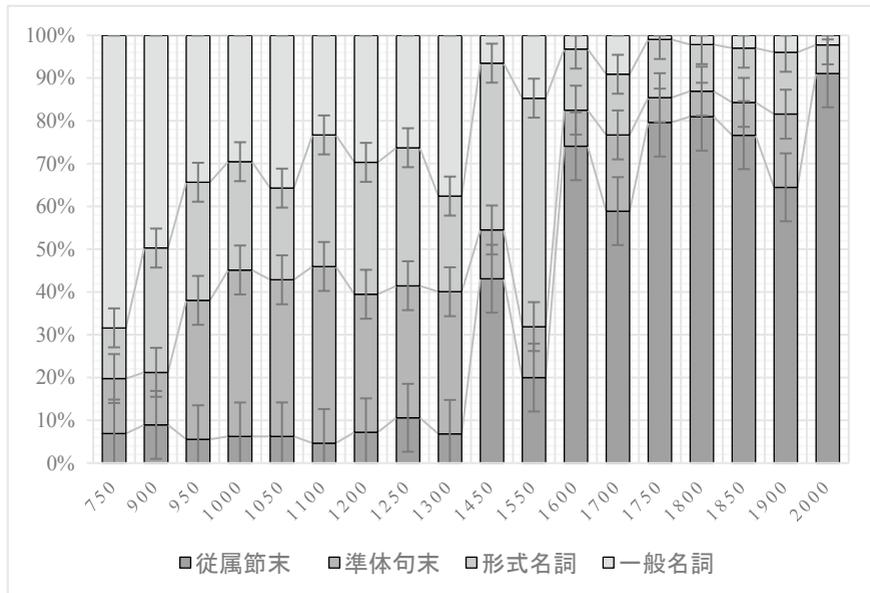


図 2 非終止用法の用例の推移

4. 連体用法の固定化

連体用法は、現代語においては以下の特定の組み合わせにほぼ限定される¹⁵。

- (13) a. お釣り二百円頂くのに、レジに電話がきて、あろうことか勘違いしてお釣りの二百円渡すべきところ、お会計の勘定九千八百円を渡したそうです。
(Yahoo!ブログ [2008] OY03_08030,3050)
- b. それにしても、フェリペにとっては、大公妃ともあろうものが、女官に傷を負わせるなどというのは、信じられない許されない行動でした。
(西川和子『狂女王フアナ』[2003] LBr2_00021,25530)
- c. デビュー戦から優勝を飾った GT-R に、もはや敵などあろうはずがない。
(秦直之『ニッサン・スカイライン R32 GT-R』[2003] PB3n_00166,21140)

これらはいずれも、コト・モノ・ハズという形式名詞への接続が可能となっているというよりは、「～うことか」「～うものが」「～うはずがない」といった形で、半ば複合辞化しているものと見てよい。

- (14) a. *私はこれから話そうことがある。
b. *大公妃ともあろうものを知っている。
c. *敵などがあろうはずだ。

このうち、モダリティ形式としてのハズ(ダ)は近世前期頃の成立と目される(山口 2002)ものである。一般名詞への連体修飾が行われなくなってもなお、新出の形式名詞に対してウが接続先を広げていたことを示す事例である¹⁶。

- (15) a. 母様でもない他人に銀貫はうはずがない。
(丹波与作待夜の小室節 [1706 演] 355-6)
- b. そうでなけりやあどれが誰だか知んなさらふ筈がない。
(恋の花染初編中 [1832 序] 53-人情 1832_06002,12050)

中世末期の形式名詞への接続についてはロドリゲス『日本大文典』に詳しく、コト・モノ・トキ・ギなどの形式名詞を後接する形で、「未来」の形態が用いられる旨が述べられる。

¹⁵ 「であろう」の場合、「(よ)う」や「だろう」に比して一般名詞への接続が容易である(三原 1995)が、ここでは扱わない。

¹⁶ ハズへのウの接続例は近世期に特に目立ち、近代に入って意志性のない述語への接続に限定されるという(菅 2007)。

- (16) a. 未来では Coto (事), mono (もの), gui (儀) の語が為すべきであったといふことを意味する動詞の力を持ってゐる。即ち、為なければならなかった、言ふ義務があった、為る義務があったといふのと同じである。例へば、Mairō cotode gozaru (参らう事でござる), yuō cotode atta (言はう事であった) といふのは、言はねばならなかった、彼にそれを言ったことは必要であったの意である。書きことばでは Coto nari (事也), mono nari (者也), guinari (儀也) がそれに相当する。

(ロドリゲス日本大文典 [1604 刊] 直説法の時, p.46)

- b. 未来と共に使はれた Domo (ども) は、往々義務があるといふ意味を示す。例へば、Mairō cotode attaredomo (参らう事であつたれども) は、参らねばならなかったけれどもの意。Mairō cotode gozanacattare-domo (参らう事でござなかつたれども) は、参るべきではなかつたけれどもの意。Mairumajiqueredomo (参るまじけれども) は、参つてしまふべきではなかつたけれどもの意。 (同・固有な接続法・未来, p.77)
- c. 例へば、Agueō toqui (上げう時) の如く、Toqui (時) の語を伴つたものは接続法の未来に使はれる。然しこの未来の正しい形は Agetarō toqui (上げたらう時) といふものである。

(同・未来形 Agueō, zu, zuru の種々な用法に就いて, p.52)

『大文典』は第 1 巻の半分ほどを「活用」に充て、「話しことば」における動詞 (上ぐる・読む・習う)・形容詞 (深い)・形容動詞 (明らかな) と、「書きことば」における動詞・形容詞の形態を一覧する。例えば「話しことば」の「直説法・未来」にはウ・ウズ・ウズルが、「書きことば」の場合にはベシ、ン・ンズ・ンズルなどが挙げられるように、ウ・ウズ (ル) と新旧で対立するのはベシ系かンであるものと観察されている。最も端的な記述を以下に示す。

- (17) Agueō, zu, ru (上げう, ず, る)。

Yomō, zu, ru (読まう, ず, る)。

Narauō, zu, ru (習はう, ず, る)。

これらは書きことばの次の言ひ方に相当する。

Aguen (上げん)。Agubequi, bexi (上ぐべき, ベシ)。

Yoman (読まん)。Yomubequi, bexi (読むべき, ベシ)。

Narauan (習はん)。Narōbequi, bexi (習ふべき, ベシ)。

(同・直説法の時・未来に就いて, p.51)

しかし、上記(16)のような形式名詞接続の場合においては、ウコト・ウモノの例に対してンコト・ンモノの例が対として挙げられることは必ずしもなく、ベシ系のみが例示されることがある。旧形式のンと新形式のウが対応せず、より意味の広い(北原 1981, 山口 1991)ベシが採られているものと捉えた上で、「話しことば」と「書きことば」を擬似的な時代差として見なすならば、この点からも、前代まではムが接続し得なかった形式名詞への接続が中世後期になって拡張したことを間接的に窺い知ることができる。

- (18) a. Cacō cotogia. (書かうことぢや。) Mairō monogia. (参らうものぢや。) Xō cotode atta. (せう事であつた。) Deusuo tattomi vyamaitatemaçuru bequi coto nari. (デウスを尊み敬ひ奉るべき事也。)
- (同・分詞の異格構成, p.397)
- b. Deusuo taixetni zonji tatemaçuru bequicotonari. (デウスを大切に存じ奉るべき事也。)
- (同・直説法の時, p.54)

5. 従属節末の用法の発生

ムは古代語においてはド・ドモにのみ接続可能であり(小田 1990・1994, 高山 2002), 現代語においても南(1964・1974・1993)においてC類従属句とされる特定の従属句内にしか現れない¹⁷。

- (19) かかる際になりぬれば、人は何と思はざらめど、口惜しうてさすらへむ、契りかたじけなく、いとほしきことなむ多かるべき。
- (源氏物語・椎本 [1010 頃] 20-源氏 1010_00046,60070)
- (20) a. 紙幣しかない場合は頼めばおつりをもらえるでしょうが、言葉が通じにくいし、たとえば「〇円おつりをくれ」とは言いにくい。
- (森優子『旅ちから』[2003] PB32_00059,78230)
- b. 最近、父親からよくメールが来ます。昨日は「クィーンベッドをオークションで競り合つて落としたぞ。寝心地良いだろうから遊びに来い。」と(笑)
- (Yahoo!ブログ [2008] OY04_07502,1510)
- c. 上まで行けば何とか植えられるやろうけど、崖っぶちのほうなんか、どうやって植えたんやろと思いました。
- (山村基毅『森の仕事と木遣り唄』[2001] PB16_00127,89540)
- d. 報道されている「名ばかり管理職」も氷山の一角でしょうし、サービス残業も未だにまかり通っています。
- (Yahoo!ブログ [2008] OY01_00622,3900)

¹⁷ 複合辞化した「(よ)うと(も)」「(よ)うが」については北崎(2019)を参照。

それぞれ、(20)のウガは中世末期、ウケレド・ウカラ・ウシは近世に例が見える。現代語のC類従属句のあり方は、これらが現代まで引き継がれる形で残ったものである。

- (21) a. 「それは時のざれ事であらふが、真実はどれへござるぞ
(虎明本狂言集・餅酒 [1642 写] 40-虎明 1642_01006,5420)
- b. 金 もう夜があけるそふだ。坂見屋も来やせふから。きげんを直しなせんし
(甲駅新話 [1775 刊] 52-洒落 1775_01010,130080)
- c. 此様なことはおまへ方のしらんした訳じやない 知りたからふけれど
まあ桂川の渋ながしあいかなはんと思はんせ
(無論里問答 [1776 刊] 52-洒落 1776_01006,23180)
- d. 恥を捨てて言うたらば、国の迎ひが蔵屋敷で。つい金を調べ、国へ連れて帰らうし。時にはこなたと縁切れる。
(心中刃は氷の朔日 [1709 演] 247-4)

この点、ウの包含の可否という点では現代語と違いがないように見えるが、現代語の場合は次例(22b)(23b)のように、ウによる意志文を従属節に埋め込むことができないことに留意しておく必要がある。

- (22) a. 残りは私がやっておこう。君は横で見ていなさい。
b. *残りは私がやっておこう {が/けれど}, 君は横で見ていなさい。
c. 残りは私がやっておく {が/けれど}, 君は横で見ていなさい。
- (23) a. 残りは私がやっておこう。君は先に帰っていいよ。
b. *残りは私がやっておこう {から/し}, 君は先に帰っていいよ。
c. 残りは私がやっておく {から/し}, 君は先に帰っていいよ。

というのも、中世後期・近世には(21)のような推量の場合以外に、次例(24)のように、明らかに述部が話者の意志を示す場合であってもウに包含される例があるためである。南(1964・1974・1993)では(ヨ)ウ・ダロウ・マイは一括されて扱われているが、より詳細に見れば、その意が意志であるか推量であるかによって階層には違いがあり、また、時代によっても異なる様相を示すのである¹⁸。

- (24) a. せめて我が身一つならば、捨てられまらしても、身の程を思い知って

¹⁸ 古代語のテンス体系においては基本形が未来を表しにくく(鈴木1992)、基本形による意志表現の例もやや例外的である(土岐2012)。近世後期から明治期にかけてウが意志専用形式になった後も、基本形による意志表現は一定の地位を保ち続ける(土岐2014)ことを考えれば、現代語に至る過程において、ムードの意味を積極的に表さない基本形のみが従属節末で生起し続けることができたのであろう。

も留まりませうが〈todomari maraxôga〉, 幼い者共をば, 誰に見譲つて何と成れと思し召すぞ?

(天草版平家物語巻 3-7 [1592 刊] 40-天平 1592_03007,6220¹⁹)

- b. 戦場へさえ赴かせられれば, 真つ先を駆けませうが〈caqemaraxôga〉, これは参らずとも, 苦しかるまじい

(天草版平家物語巻 4-15 [1592 刊] 40-天平 1592_04016,1950²⁰)

- c. 綱 ほんにあの時はわつちもいつそ酔いたよ 三 そんならちつとつぎんしようから出しなんし

(甲斐新話 [1775 刊] 52-洒落 1775_01010,60300)

- d. 今日の働き, 半日払ひにせうけれど, なまなか半手間取らうより, 頼みの祝に皆進上にさつしやれと. お内儀様の言渡しと,

(薩摩歌 [1704 演] 296-3)

- e. ト庵が見えたら灸をせう。女子の手が葉ぢや。きさに据ゑてもらはうし, 二郎兵衛に手伝ひさしよ。 (今宮の心中 [1711 演] 305-14)

なお, 従属節末の用法のいくつかは, ウが, 接続可能になった時期が他のベシ・ウズ・マジ・マイなどの推量系の助動詞に比して遅いという共通点が見られるものがある。このことについては, 特に中世後期資料の調査の幅を広げた上で稿を改めて述べたい。

- (25) a. 有若答云, 上へ十分一ヲトラバ百姓ガ業ヲステマジキホドニ家々皆富貴スベシ。 (応永本論語抄・論語顔淵第 12 [1420] 502-9)

- b. スルニ, カタカラウホドニ云ワウニモ^{カタウ} 訶ナウテハカナウマイゾ。

(史記抄・弟子列伝 [1477] 3-133-14)

- (26) a. 他人ノ勢アル者ナラバ, 吾ウデニテハエ殺スマジキガ, 伯寮ニ於テハ吾力ニテナリトモ, 子路ガ罪ナキヨシヲ季孫ニ聞テ市朝ニ殺シテノケント云。 (応永本論語抄・論語憲問第 14 [1420] 589-1)

- b. サウシテモ, 好悪ガ, 齊ノ風俗ニチガウタラバ, 国ハ治ルマイガ, ヨク好悪ヲ同ジウシタホドニ, ヨク治タゾ。

(史記抄・管晏列伝 [1477] 3-25-9)

- c. 戦場へさえ赴かせられれば, 真つ先を駆けませうが〈caqemaraxôga〉,

¹⁹ 斯道文庫本の対応箇所では 2 文で表されている。

・捨ラレ奉ル身ノホドヲ, 思ヒ知テモ留リナン, 幼キ者ドモヲ…

(斯道本平家物語巻 7・459-1)

²⁰ 斯道文庫本では「ベク候ガ」と対応する。

・戦場ヘダニ趣玉ハバ, 真先ヲ懸ベク候ガ, 是ハ, マイラズトモ, 苦ウモ候マジ,

(斯道本平家物語巻 10・619-3)

これは参らずとも、苦しがるまじい

(天草版平家物語巻 4-15 [1592 刊] 40-天平 1592_04016,1950)

6. おわりに

ウの非終止用法は全体としては衰退するが、その内実、中世後期には従属節への取り込みが起こる形で従属節末の用法が伸張し、連体用法は一般名詞から形式名詞への接続に偏るようになる。すなわち、非終止用法の「衰退」「固定化」は単調減少的なものではない。本稿では歴史的な大勢を示したに過ぎないが、上で明らかにしてきたことは、「文の様相的な意味を主文でまとめて表そうとする性質」(金水 2011: 115)への進行が必ずしも一様ではなかったことを示唆するもので、現代語における階層構造に至るまでの日本語の文構造史を考える上で、必要な手続きであるように思う。

使用資料 (3 節に挙げたものを除く)

斯道本平家物語：『百二十句本 平家物語』汲古書院

応永本論語抄：中田祝夫 (1976) 『東山御文庫蔵称光天皇宸翰応永二十七年本論語抄』勉誠社

ロドリゲス日本大文典：土井忠生訳註 (1955) 『日本大文典』三省堂

参考文献

青木博史 (2005) 「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1(3), pp.47-60.

小田勝 (1990) 「中古和文における接続句の構造」『国学院雑誌』91(8), pp.38-47.

—— (1994) 「接続句の制約からみた中古助動詞の分類」『国学院雑誌』95(7), pp.16-25.

尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版.

—— (2012) 「不変化助動詞とは何か—叙法論と主観表現要素論の分岐点—」『国語と国文学』89(3), pp.3-18.

北崎勇帆 (2019) 「「～(よ)うと」の一群の成立と展開」『日本語文法』19(1), pp.3-19.

北原保雄 (1981) 『日本語助動詞の研究』大修館書店.

金水敏 (2011) 「統語論」金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店, pp.77-166.

金田一春彦 (1953) 「不変化助動詞の本質」『国語国文』22(2・3), pp.1-17・15-35, 金田一春彦 (2004) 『金田一春彦著作集 第 3 巻』玉川大学出版部, pp.305-351 所収.

栗田岳 (2014) 「連体修飾のムー「思はむ子」をめぐって—」『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』21, pp.15-27.

—— (2019) 「助動詞ム」論『国語語彙史の研究』38, pp.121-138.

此島正年 (1973) 『国語助動詞の研究—体系と歴史—』桜楓社.

- 小林賢次 (1979) 「中世の仮定表現に関する一考察—ナラバの発達をめぐって—」 中田祝夫博士功績記念国語学論集刊行会 (編) 『中田祝夫博士功績記念国語学論集』 勉誠社, pp.297-322.
- 坂井美日 (2015) 「上方語における準体の歴史的変化」 『日本語の研究』 11(3), pp.32-50.
- 重見一行 (1988) 「「む」は「推量」か」 『国語国文』 57(2), pp.31-50.
- 城田俊 (1977) 「《う／よう》の基本的意味」 『国語学』 110, pp.37-46.
- 菅由美子 (2007) 「「はず」の上接語「う」について—近世・近代期を中心に—」 『国語国文研究』 132, pp.58-45.
- 鈴木泰 (1992) 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』 ひつじ書房.
- 高山善行 (2002) 『日本語モダリティの史的研究』 ひつじ書房.
- (2005) 「助動詞「む」の連体用法について」 『日本語の研究』 1(4), pp.1-15.
- 土岐留美江 (1992) 「江戸時代における助動詞「う」—現代語への変遷—」 『都大論究』 29, pp.37-49.
- (2012) 「意志表現とモダリティ」 澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座第4巻 モダリティⅡ：事例研究』 ひつじ書房, pp.121-140.
- (2014) 「動詞基本形終止文の表す意味 古代語から現代語へ」 『日本語文法』 14(2), pp.17-33.
- 外山映次 (1969) 「条件句を作る「ウニハ」をめぐって」 佐伯梅友博士古稀記念国語学論集刊行会 (編) 『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』 表現社, pp.447-467.
- 中沢紀子 (2004) 「連体修飾節にみられるウ・ウズル」 『筑波日本語研究』 9, pp.55-68.
- 野村剛史 (1995) 「ズ, ム, マンについて」 宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会 (編) 『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』 明治書院, pp.2-21.
- 蜂谷清人 (1977) 「狂言古本における仮定条件表現—「ならば」「たらば」とその周辺—」 『成蹊国文』 10, 蜂谷清人 (1977) 『狂言台本の国語学的研究』 笠間書院所収.
- 原口裕 (1978) 「連体形準体法の実態—近世後期資料の場合—」 春日和男教授退官記念語文論叢刊行会 (編) 『春日和男教授退官記念 語文論叢』 桜楓社, pp.431-450.
- 福嶋健伸 (2011) 「中世末期日本語の～ウ・～ウズ(ル)と動詞基本形—～テイルを含めた体系的視点からの考察—」 『国語国文』 80(3), pp.44-64.
- 南不二男 (1964) 「複文」 森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝 (編) 『講座現代語6 口語文法の問題点』 明治書院, pp.71-89.
- (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店.
- (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店.
- 三原健一 (1995) 「概言のムード表現と連体修飾節」 仁田義雄 (編) 『複文の研究(下)』 くろしお出版, pp.285-307.
- 山口堯二 (1991) 「推量体系の史の変容」 『国語学』 165, pp.26-37.

—— (2002) 「「はずだ」の成立」『国語と国文学』79(11), pp.107-129.

山本淳 (2003) 「仮定・婉曲とされる古典語推量辞「む」の連体形—『三卷本枕草子』にある「らむ」「けむ」との比較を中心に—」『山形県立米沢女子短期大学紀要』38, pp.47-62.

湯澤幸吉郎 (1954) 『江戸言葉の研究』明治書院.

吉田永弘 (2011) 「タメニ構文の変遷—ムの時代から無標の時代へ—」青木博史 (編) 『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版, pp.89-117.

付記 本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の成果の一部を報告したものであり、第83回中部日本・日本語学研究会における口頭発表の内容の一部を加筆修正したものです。発表の席上において御教示を賜った先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。

(きたざき・ゆうほ 本学講師)